

報 告 書

調査・研究テーマ	さいたま国際芸術祭の成果と今後の課題について
目 的	さいたま国際芸術祭2023を中心とした成果と、今後の改善策について知見を得る
内 容	日 時：2024年2月2日（金） 17時00分～18時30分 会 場：オンライン（ZOOM） 講演者：石上城行氏（埼玉大学教育学部教授、アーツカウンシルさいたまアドバイザーボード委員、元さいたま市文化芸術に関する意見交換会委員長） 参加者：三神 尊志、佐伯 加寿美、佐々木 郷美、 政務調査員 報告書作成者：三神 尊志
概 要	<p>○さいたま市の文化芸術施策と、さいたま国際芸術祭2023の成果と課題について</p> <p>今回は評価が二分される芸術祭だった。</p> <p>そもそも、さいたま市文化芸術都市創造条例は2012年4月施行、実態調査にもとづき検討を重ね、文化芸術都市創造条例計画を策定（2014年3月）した。</p> <p>・文化芸術施策全般について</p> <p>さいたま市の文化芸術施策の実施状況は、計画に照らし合わせると、市民参加の機会は充実している。バリアフリーや多言語対応は不十分、情報発信、ネットワーク化は進んでいない。助成制度も規模的には問題ない。ただし、質的検証がされていない。</p> <p>計画では、2014～20で文化的なまち・芸術のまちとイメージする市民の割合を15%から25%に上昇させるのが目標であった。しかし、市長マニフェストの重点プロジェクトの実現という形で、さいたま国際芸術祭が開催されている面があることは否めない。</p>

概 要

・さいたま国際芸術祭2023について

アートプロジェクト、市民プロジェクト、連携プロジェクトの3つの柱があり、「共につくる、参加する」というコンセプトが通底している。

公募ディレクター、市民サポーター、市民アーティスト、アウトリーチプログラムの充実といった面で、人材育成と文化資源の活用、レガシー事業の継承と発展が図られている。

アートプロジェクトについては、メイン会場での展示の導線をあえて不明確にしていた。ポートレイトプロジェクト、小学生による家族の写真など、実は市民を巻き込んだ作品が様々ありとてもよかったが、あまり表に見えてこなかった裏情報を知っていれば面白かったが、深く味わうにはハードルが高かった

市民プロジェクトについては、市内アーティスト活動を広域展開し、こどもへのアウトリーチも充実していた。サポーターによる鑑賞ナビゲートを計画したのもよかった。期間前から活動し、アウトリーチで市内5小学校へアーティスト派遣、児童と作品制作も実施。展示プログラムと連携して2名が市内滞在、レジデンスの体制も構築できていた。ゆかりあるアーティストの展覧会を期間中に集中開催し、市内の学校とともに作品を制作する「街をかざるエクストラ」等が拡大、埼玉新聞と協働して中学生記者等の試みも展開された。

連携プロジェクトについては、総勢23の組織団体が連携協力を行った。

【良かった点】

- ・否定的な声は少なくなったが、認知が広がり期待値も上がった（そのため新たな対応も求められた面もあり）
- ・メイン会場は圧倒的で見応えがあった
- ・期間中に市民の芸術活動を集中させることができた
- ・鑑賞プログラムが充実していた
- ・アウトリーチプログラムが拡充し、1000人を超える子供がかかわることができた
- ・メディア展開が定着するとともに広がっている

【反省点】

- ・メイン会場では十分な準備のないスタッフがアテンドを行い、混乱を招いた面があった。来場者に問われれば答える

概 要

という役割だが、市役所の職員が動員されていた。本意ではない動員でマニュアル等が反映されていなかったのではないか

- ・参加アーティストの情報を完全に伏せたため、集客にバリアが生じたのではないか
- ・説明を排除したため楽しめない方が多数発生した
- ・全体を統括する役割のディレクターだが、「メイン会場のみをキュレーションする」といった発言や、唐突に全体運営に対して要望を述べたりした結果、齟齬が生じたように感じる
- ・ディレクターの守備範囲や、市がどこまで対応すべきなのかについて不明確だったことも要因ではないか
- ・会期中、ディレクターと市民との交流の機会が少なかった
- ・市民プロジェクト側から、メイン会場と連動した仕掛けを提案したが、なかなか成立せず、当初は鑑賞ガイドツアー等に消極的だった
- ・市民プロジェクトは広域に展開しすぎて全体把握がむずかしく、交通手段に関する情報が足りずたどりつけない、という状況が発生した
- ・プログラムの日程重複があった（事前調整はなかった）
- ・市民アーティストの意見バラバラだった
- ・市民が能動的にかかわれる企画が少なかった

全体として、アートプロジェクト、市民プロジェクト、連携プロジェクトの建付けの検証が必要ではないか。

またディレクターの役割や立場の精査と再定義が必要であると考え。これだけ市民活動のボリュームがあり存在感ある地域はなかなかない。招聘ディレクターが全体をやれといわれてもむりがある。

アーティストディレクターだとしても、全体との関りの交通整理は、他自治体では自治体側が行うケースが多い。さいたま市ではその点の整理が必要。

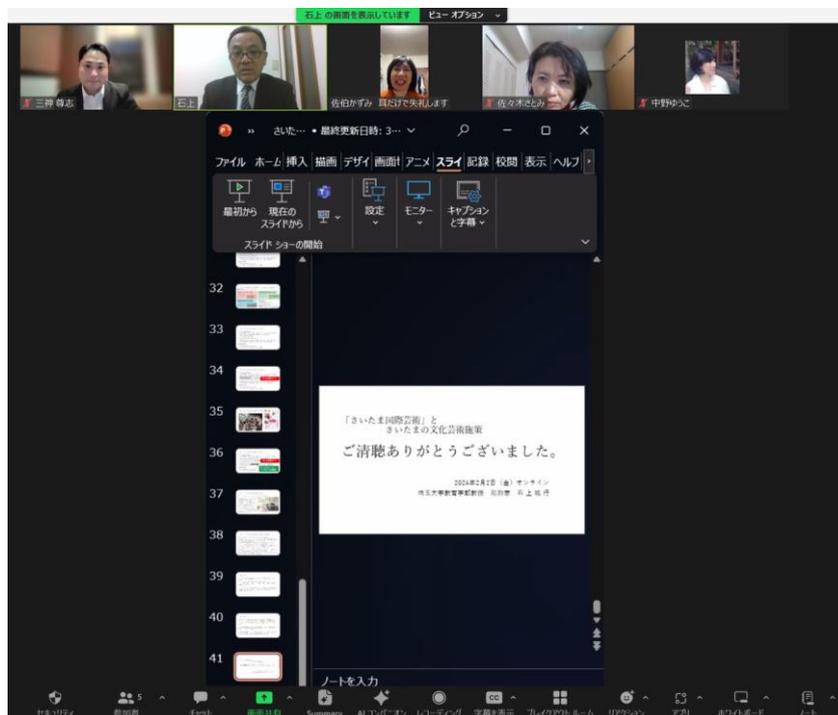
広報戦略と交通案内の充実が必要である。適切な接遇と交通手段の確保を行うために、サポーターにアテンドを担当していただいているどうか。サポーターのすそ野は広がり、レベルが上がっている一方で、活躍の場がなく不満がたまってい

概要

る。初回のさいたまトリエンナーレでは、芹沢ディレクターの取り組みがうまく、適切な活躍場面があった。サポーターにはその能力ややる気を持った方が多い。

そもそもさいたま市の体制や能力は大規模な芸術祭を行うことができるのか、という根本から考えていくことが必要ではないだろうか。

今後はアーティストインレジデンスをもっと行ってはどうか。日本では実施されるのは田舎や過疎地が多いが、世界では大都市でのアーティストインレジデンスが行われている。大都市は課題が見えづらい。不満はないが何か足りないという感覚があるが、長期で腰を据えてまちを見ていかないと明確化できない。アーティストは独自の感覚をもっており、外からくると余計に違って見える。外部のアーティストを招くことで、課題を発見し、その改善ビジョンを示してもらうことができるのではないか。アートは答えを示すものではなく、問題提起を行ったり、ビジョンを示したりするもの。違った角度から一緒に考えて、さいたまの未来を一緒に考えてはどうか。



<p>所見・成果</p>	<p>さいたま国際芸術祭が全国に類を見ないオリジナリティに富んだ取り組みであることを再認識することができた。各個のプロジェクトを詳細に確認すると、弱いと言われている市民参画も以前と比べるとかなり進んでいることがわかった。一方で、巨大かつ細分化された芸術祭であるために全体のマネジメントが難しく、また責任範囲が不明確になっている実情を把握した。</p> <p>芸術祭実行委員会に責任を問うのではなく、市が明確なビジョンを示すとともに責任範囲を明確化し、それぞれのプロジェクトや関係する方々の連携を一層密にすることが、国際芸術祭の市民満足度の向上につながると考える。</p> <p>また芸術祭ありきではなく、文化芸術振興を行う上でなぜ芸術祭が必要なのか、芸術祭を行うことでまちがどう変化していくのか、その目標設定が達成されているのか、を常に考え、検証し、ブラッシュアップしていくことが必要であると考える。</p> <p>今回のヒアリングを通じて得られた知見を活かし、令和6年2月定例会の代表質問などを通じ、市に対して改善を提案していく。</p>
--------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------